

特別支援学校高等部（知的障害）における「がん教育」の工夫

外部講師による生徒の理解レベルに合わせた特別講義の実践
○佐藤智彦
（東京慈恵会医科大学）
三田地真実
（星槎大学大学院）
KEY WORDS: 特別支援学校（知的障害）、がん教育、外部講師の活用

【背景と目的】学校における健康教育の一環としての「がん教育」は、「①がんを正しく理解する」、「②健康と命の大切さを主体的に考える」ことを目標にしており、その実施には、外部講師の活用が推進されている（文部科学省、外部講師を用いたがん教育ガイドライン、2016: 以下、GL）。それを受けて、東京都教育委員会（健康教育推進委員会）は、発達段階に応じたがん教育リーフレット及び教師用の手引を都内の全公立学校に配布してがん教育の推進に努めている。しかし、がん教育を含む学校健康教育での外部講師の活用には、予算、日程調整、学校健康教育の時間確保等の課題がある（佐野・井出・物部、2018）。そして、2,149 校（2017 年時点）にのぼる都内公立学校への外部講師の派遣も大きな課題である（山田、2019）。東京都がん教育推進協議会による提言（2018 年）で、校種別の「授業のねらいと外部講師の活用モデル」が示されているが、特別支援学校でのがん教育実施に関するモデルは示されていない。

先の GL に従い、生徒にとって意味のある「がん教育」のためには、外部講師（以下、講師）と学校側での綿密な打ち合わせが重要だが、発達段階とともに障害の特性に応じた教育を行う特別支援学校ではその重要性はさらに高い。

本報告の目的は、講師（第一著者）による、特別支援学校高等部（知的障害）でのがん教育特別講義（以下、講義）の実践における学校側と外部講師の準備プロセスを示すこと、講義の録画記録による省察から、「生徒の理解レベルに合わせた講義」のための講師の工夫を分析することである。

【方法】○外部講師によるがん教育特別講義の概要
一実施時期：X 年 10 月末日
一場所：都内 A 特別支援学校（A 校）高等部（知的障害）（生徒・教員はコロナ感染対策をした上で体育館に集合）
一受講者（類型別：生徒+引率教員）：
重度；78+20 名、中度；78+20 名、軽度；100+15 名
一講義時間（3 部制）：第 1 部；25 分（中度）、第 2 部；20 分（重度）、第 3 部；30 分（軽度）
一講義形式：MS PowerPoint を用いた講義+質疑応答
一講義内容：体のしくみと細胞分裂、まちがいさがし（クイズ）、がんの特徴（正常組織との比較）、がんの検査・治療、食事とがんの関係（健康維持とがん予防）など
一外部講師の属性：総合内科専門医、非がん専門医、A 校の学校運営協議会（学運協）の外部委員、教員免許状更新講習（保健医療）の講師歴あり

一録画：学校側が記録のために 3 つの講義を録画
①上記講義の企画から実施までのプロセスを、学校側と外部講師側の行動に分けて、時系列に沿ってまとめた。
②類型別（重度・中度・軽度）に実施した 3 回の講義の録画記録を用いた省察から、「生徒の理解レベルに合わせた講義」を実践するための講師の工夫を分析した。

【結果】①講義の企画から実施までのプロセス
学校側と外部講師側の行動を表 1 に示した。企画当初は全校生徒が一堂に会しての 90 分講義を予定していたが、「発達段階に応じた講義形態にしたい」という A 校教員の構想から、3 部制（類型別）の講義を実施することになった。事前準備の段階で、教員と外部講師が複数回にわたり

相談を行った。その形式は、対面、電話、e メールを組み合わせたものであった。講師は、講義スライドの作成にあたり、A 校教員が通常授業で使用しているスライド（類型別）、および学運協での通常授業の見学内容を参考にした。
②録画記録を用いた講義での外部講師の工夫の分析

質疑応答の時間を除く講義時間は重度 13 分、中度 15.5 分、軽度 20 分であった。講師は、各講義で話すスピードと口調を使い分けていた。各講義の中で講師からの質問回数は 11 回、20 回、30 回であり、講義時間 1 分あたりの質問回数は 0.8 回、1.3 回、1.5 回であった。なお、3 つの講義とも、参加生徒は熱心に聞き、途中の質問に積極的に答え、講義終了後に多くの質問を投げかけていた。

【考察】①外部講師による教育講義の実施に必要なこと
今回の「がん教育」の実践は、生徒・教員・講師の満足度がいずれも高かったと評価できた。この結果に大きく影響したのは、「発達段階に応じた講義形態」にするための教員と講師の複数回にわたる相談であった。特に、外部講師が通常授業での生徒の様子を実際に複数回観察したこと、通常授業で使用されているスライド資料を閲覧したことは、今回の講義内容・方法を構築する上で大いに参考になった。
②生徒の発達段階に応じた講義のための工夫

講師の工夫は、「話す速度」、「口調」、「質問回数」であった。録画記録からも、生徒の理解レベルに合わせた「話す速度」や「口調」で各講義の内容を説明していたことが確認された。この実践には、事前に類型別の授業を見学して、生徒の理解力を把握できたことが影響したと言えた。

③学校でのがん教育における外部講師の活用
今回の外部講師は、前出 GL の適任者（学校医、がん専門医、がん患者、がん経験者等）には該当しなかったが、この実践から、特別支援学校でがん教育を行う外部講師に重要なことは、教員と連携して生徒の発達段階と理解力を事前に把握して準備を進めることだと考えられた。
【利益相反】第一著者、第二著者：A 校学運協外部委員
【文献】佐野史織ら（2018）. 学校健康保険における外部講師活用の課題、日本体育学会第 69 回大会予稿集
山田善裕（2019）. 東京都内公立学校にがん教育の充実を目指して、第 28 回日本乳癌検診学会学術総会
【謝辞】A 特別支援学校の先生方に深く感謝申し上げます。（SATO Tomohiko, MITACHI Mami）

表 1.
がん教育
実施までの
A 校教員と
外部講師
の行動
※
A 校教員と
外部講師
による
相談内容

企 画	日 時	A校教員の行動		外部講師の行動
		がん教育の企画（発達段階に応じた講義形態にしたい）		
打 ち 合 わ せ	X-1 年	10月	講師の打診、仮日程の提示	日程調整
		11月	講義のコンセプトの確認：対面（学運協）※	
		1月	日程の確定	
	事 前 準 備	6月		講義資料の予備調査
		7月	講義のアウトラインの相談：電話※	
			授業スライドの提供（類型別：メール）	スライドの体裁の確認：字体、大きさ、フリガナ、色彩など
		7月末	教育委員会リーフレット配布：全校生徒および教員に	
		9月初旬	実施要項の確定・送付	スライド作成開始
		9月中旬	類型別の講義内容の相談（通常授業の理解度：メール）※	
		9月下旬	配慮が必要な生徒に関する情報共有：電話※	
		10月初旬		スライド案の提出（メール）
本 番 実 施	X 年		受講生徒がスライド内容を理解できるか確認：メール※	
		10月末日	生徒の引率	講義の実施（3部制）
			講義へのフィードバック（双方向：対面、メール）※	
		11月初旬	講義録画記録の共有	
事 後		11月中旬		録画記録の視聴・分析
		11月下旬	講義へのフィードバック（双方向：対面、学運協にて）※	